

西藏旅行記 2 (承前)

幸田 和彦

2019 TIBET TOUR

散策の目的地はバルコルと呼ばれるジョカン寺（大昭寺）を取りまく石畳の周回路。私はラサの名所といえば世界遺産である「ポタラ宮殿」しか知らなかった。が、はるばるラサにたどり着いた巡礼者が目指す聖地のひとつとしてジョカン寺とバルコルがあることをこの時初めて知った。巡礼者はジョカン寺の門前で祈り、時計回りに「オムマニペメン」（南無阿弥陀仏）の真言を唱えマニ車を廻しながらこのバルコルを巡るのだそうだ。



このバルコルで私の目に飛び込んできたのは、あふれかえる観光客の中でひたすら体を投げ出し祈っている巡礼者の姿だった。映像の中でしか見たことのなかったあの五体投地が、今まさに私の目の前でおこなわれていた。五体投地とは全身を投げ出す礼拝方法である。投げ出した身の丈ほどを前進しながら礼拝を繰り返す最も丁寧な巡礼とされている。時間的にも体力的にも並大抵の礼拝ではない。チベットでは村々からこの五体投地をしながら巡礼者達がラサを目指す。遠く離れた村から数ヶ月をかけての巡礼も珍しくないそうだ。「日本のお伊勢講に似てなくもないですね。」と渡部さん。その解説によると村人が供出した路銀で、村の代表として巡礼する習わしがあるそうだ。大八車に鍋釜を積んで家族で出発する例もあると聞いた。五体投

地をする人と荷車を引く人がいることが分かった私は「荷車を引くの方が楽そうだなあ、荷車は交代で引くのかな？」そんな想像をした。が、その発想は信仰心のない者の浅はかな想像でしかなかった。荷車を引いてその日の宿営地に着いた巡礼者は、荷物をそこに置いてその日のスタート地点まで引き返し、五体投地をしながら宿営地までまた進むそうだ。巡礼者の目的はラサ到着ではない。その目的はひとえに祈ること。信仰が日々の生き様に根ざしているチベットならではの逸話としてなるほどと思う。が自分自身の生き様とのあまりにもの違いに私の頭は混乱した。目の前で観光客に混じりながら五体投地をしている巡礼者を失礼を顧みず必死にカメラに納めながらチベットにいることを実感した。

週刊 夕焼け通信 VOL.1230
夕焼け通信社
〒699-0825 島根県松江市西川津町4276-402
編集 宮森健次 創刊1995年4月25日
E-mail: miyaken@mc.com

目次

手作りのくらし2	木幡 智恵美	1
ニュース日記	中村 礼治	2
西藏旅行記	幸田 和彦	4

手作りのくらし2 23 パンツ(2) 木幡智恵美

買った布地は2種類。白地に大柄で薄い色の花が描かれた布と、明るい緑の地に幾種かのカラフルな小さい動物が描かれた布だ。白地の方は、フリルのついたキュロットにするつもりで、緑の方は七分丈のパンツにと考えて買ったのだが、家に帰って眺めているうちに、白の方は汚れが目立ち、保育所ではくパンツにはどうかと思いだした。

そうだ。もうすぐ娘の誕生日。大人のブラウスにいい模様ではないか。実歩のパンツはひとまず置いて、早速娘のブラウス作りにかかることにした。大人用の服の雑誌を手にし、めくっていく。コート類が多いので、なかなかこれと思うものは見つからない。一つだけ、簡単にできそうなチュニックを見つけた。丈を少し短くし、腰にベルトでもすればいい感じだ。カレンダーの裏紙を使って、チュニックの型紙を写していく。丈は実際の型紙より10センチほど短くす

る。裁断すると、測ったように余り布がほとんど出なかった。

仮縫いをして着てみる。前身ごろも後ろ身ごろも1枚布で、ボタンもチャックもない。前身ごろの胸元部分に切り込みがあるだけで、かぼつと被って着る服だ。私には少し大きめだから、娘にはちょうど良いだろう。本縫いをする。袖口から10センチほど上の部分にゴムを入れる。この服のポイントとなる箇所だ。何とか娘の誕生日に間に合った。

夫の忠ちゃんは娘より誕生日が2日早い。だから、毎年二人分まとめて誕生日プレゼントをあげている。忠ちゃんには、晩酌に飲む忠ちゃん好みの銘柄の酒と決めている。娘のは毎年迷うので、今年は白い布が目の前に現れて助かったようなものだ。

誕生プレゼントをあげてから最初の寛大実歩のお迎えの日、娘がああのブラウスを着て現れた。なかなか似合っているじゃないか。

ニュース日記 708

中村礼治

安倍改造内閣から見えてくるもの

30代フリーター やあ、ジイさん。安倍晋三は内閣改造後の記者会見で憲法改正を「必ずや成し遂げていく」と語ったと報じられている（9月12日朝日新聞朝刊）。

年金生活者 本人は本気のつもりかもしれないが、おのれの政治生命と引き換えにしても、といったような覚悟は伝わってこない。7年近くかけても目鼻のつかなかったことが、残った総裁任期の2年間で前に進むと考えるのは難しい。

国民の多数が一時期を除いて自民党政権を支持してきたのは、この党が憲法改正に手をつけなってきたからだ。安倍晋三の祖父の岸信介は改憲をもくろんだが、実行に移す前に日米安保条約改定の強行で国民の不信を買い、退陣した。彼のあとを継いだ保守本流の池田勇人は「経済優先」と「軽武装」を基本路線とし、それ以降、改憲は自民党の党是でありながら封印された。

安倍晋三は「戦後レジームからの脱却」を掲げてその封印を解きにかかり、改憲への国民の支持を得るために、アベノミクスの名のもとに「経済優先」を推し進めた。だが、「軽武装」の「軽」を取る9条改正には国民の多くが反対し、現在の状態は事実上、かつての保守本流の路線と変わらないものとなっている。それが安倍内閣の底堅い支持率を支える要因のひとつとなっている。

30代 改憲の強行は政権を危うくするかもしれない。

年金 それでも旗はおろすわけにはいかない。それが彼の存在理由のひとつだからだ。下世話に言えばコアな支持層をつなぎとめる必須の条件だからだ。自民党が改憲を封印しながら自主憲法制定の党是をおろさないうべきなのとそれは似ている。それがこの党の存在理由のひとつであり、党員の結束に欠かせない看板と考えられている。

30代 安倍晋三は同じ記者会見で「新しい社会保障のあり方を大胆に構想」と語り、「全世代型社会保障検討会議」の新設を明らかにした。高齢世代を中心に負担増と給付削減の「痛み」を強いる宣言と多くの国民が受け取ったことだろう。

年金 「痛み」なしに社会保障制度の維持はできないという考えは低成長時代の現在、もっともらしく聞こえる。だが、それは高度経済成長時代の発想を引きずった考えだ。

高度成長時代は税収がどんどん増え、それを社会保障にあてることができた。いまは当時ほど税収が増えないので、社会保障を削るしかない。一見あたりまえのようなこの指摘は、国家による富の再分配は税をその手段の中心にしないとできないという考えを前提にしている。税金ではなく、借

金でもいいではないかという発想はない。

税金ももとをたせば国民からの借金だ。国民のために使うカネを国が国民から一時預かっているのが税であり、その正体は国債と変わらない。違うのは、税金がそれを使うことによって返済できる借金であるのに対し、国債はそれで得たカネを使うだけでは返済できず、将来の税、すなわち新たな借金によって返済する仕組みになっている点だ。

30代 だから、無制限に国債を発行するわけにはいかない。

年金 国債は必ず返済しないと、赤字がたまる一方だというのは、どんな場合でも成り立つ命題ではない。現在のようにマイナス金利が常態化した時代には国債を発行すればマイナス金利分が収入となり、借金を減らしていける。

その背景には、何度も言ったように、富の稀少性の縮減がある。この人類史的な変化をひとことで言うと、交換価値の減少と使用価値の増大と言いあらわすことができ。だから、再分配の物差しも交換価値から使用価値に移していく必要がある。税金は交換価値の再分配には有効でも、使用価値の再分配には適していない。だから税収は伸びなくなつてかまわない。代わりに国債が効力を発揮する。

30代 内閣改造を報じる新聞には政権の

目玉のはずのアベノミクスを取り上げた記事が見当たらなかった。

年金 アベノミクスは、超低金利のもとでは政府が借金を重ねても財政インフレが起きないことを実証した点で画期的な政策といえる。だが、金融緩和と借金によるばらまき財政でデフレを退治し、経済成長を促すことができると期待した点で旧態依然の考えにとらわれていた。

インフレが起きないのは、デフレが世界経済の基調として定着しているからだ。人類史を支配してきた富の稀少性が大幅に縮減してきたことがその背景にある。デフレ脱却ははじめから不可能だった。

ところが、安倍政権はそれが可能と錯覚し、経済成長すれば税収が増え、借金を返せると考えた。国の借金は必ず返さなければならないという考えを疑っていなかった。

確かに民間企業ならそれは疑う余地がない。借金したら、しっかり稼いで返さないと、企業はつぶれる。しかし、国は稼ぐ必要がない。日銀が輪転機を回せばいくらでも通貨を発行できるからだ。

アベノミクスは、その新しさが不徹底だったため、賞味期限が短くなり、今は政権の側もあまり宣伝しなくなった。だが、その古い部分である借金への警戒を解け